花柳事情

酔白道士戯著

中

ヲ6
434
2

東京帝國大學圖書之印
帝國大學
門
號 434
卷 2
明治三十六年十一月 五日
坪内雄蔵氏寄贈

花柳事情中之巻

花柳御門　醉多道士戯著

○揚代金の分配

揚代則ち玉い一本を以て廿五匁と定む故ゆ金八十七匁五厘のおらんい三本半五十匁のい二本廿五匁のい全たく一本ゆく一宵の春と賣る而して其揚代い何も皆之と三分ゆ一其配當い後ゝ今バ八十七匁五厘なもバ此内二十五匁とおらんの手ゆ渡し内十二匁五厘と前借の

消却ふ廻し（但し前借せざる者なり）と其小遣ふ充て残る六十二戔五厘の内六戔と茶屋の伴銭ふ與へ二戔一厘と税金（五一本ふと付六厘く）となし（但幾人の廻しを取るも皆此の如く取る也）其残額五十四戔六厘い貸坐敷の屋根代及び飲食費楼主の潤益となる之ま由て此と觀ば八十七戔五厘と鼻まうけ私しい大見世のおいらんダヨと妙ふ見識ぶると雖ども斯く内幕と顕せば其実十三戔六戔の代物價額と以く論ぜもい彼の銀

坐街頭揚柳のトふ立ち且那晩如何さまと露と生計の地獄的と其間ふ毫髪と容ぜ偖之ふ順ドて五十戔二十五戔の娼妓の分配と見もバもど甚だ憫然なる者有り乃ち五十戔の娼妓い其手ふ諸差引して余る者い六戔一厘五毛二十五戔の娼妓い僅うに三戔一厘二毛五抄と餘もの〻何ともハヤ可憐の至りなちぜや抑も関西地方廻し無き所の人氏い動ももバ東京の娼妓ど廻し一宵ふ数人の客ふ應ぜると廻しと云と取と痛く忌ども東

西其景像と異ふもろと知らざるの致す所蓋し関西地方（但し静岡二丁町西京島原大坂新町同松島等の如きハ東京ハ変らも）の娼妓ハ多く他の揚屋ハ往く春と賣ゞ故ハ部屋夜具調度等もいらも家婢と役もるハも又ハ之も加ふる衣裝並びハ飯等い皆其楼主より貸し渡さるゝ者なれバ仮令バ一宵八戔二厘五毛と得バ則ち九ぐりとあり て復他の散銭なり是と以く廻しと取らざるも敢て困却ゞ来も可らぞと雖も東京の娼妓ハ至ていハ大ハ然らも前ハ

幾ゞ言しゞ如く部屋並びハ調度夜具ハ勿論家婢ハ給金と此へ其上錦繍の衣帯と需むる等此種ゞ雑多の物天より も降らも地よりも涌くゞ皆玉ハ由く之と得其足らざる処ハ客の懐ゞ的ハもるなきバ廻と取ざらんと欲もるも夫も得可けんや南京の順皇帝譲位千其臣蕭道成泣而弾指曰願後身世々勿復生天王家余曰人生莫作娼妓身晝夜苦業利他人

○臺の物利益分配

方二尺の堞皿ハ一舐ハ足らざる下物を盛ハ青
楼の外之を非るなり白壺四合の酒を二十戔ハ
賣る所ハ又青楼の外ハ見ざる所なり士馬羅亜
山高しと雖ども豈若ん太平洋滅法海と
雖ども豈是ハ及ん高いの根元無味の司蓋し
酒肴ハ其本色ハ非ず唯春を鬻ぐを本とすと雖
とも若し爪頭ハ火と點ずる各翁として其物を
見せ其價を聞しめば吃驚胸顫早腰を抜ぬハ其
人を俟ずして明らなり余今之を明解し看官の

シヤックリを医せんと欲せ二郭芳原根津四宿を問
へ臺の物に二種あり曰く並臺曰大臺是なり
而して並臺ハ二十五戔大臺ハ五十戔並臺ハ二
皿一皿へ肴を盛り一皿ハ精進物大臺ハ二皿の外に鍋ら或ハ
汁物等を添ゆ皆一舐ハ足らざる其ポツチリなる
也推知すべし人或ハ曰ん サテく廓中の料理店
ハ何為ば斯く非常ハ貪ぶるやと是き決して割
烹店の貪ぶるに非ず青楼及び茶屋の貪ぶるな
り其本價を問へば二十五戔の臺ハ十戔五十戔

の臺ハ二十銭白壺の酒ハ十銭なり斯の如く皆な二倍以上の利を貪ぼるが為めに往々不通の客をして快さらしむと雖ども花街ハ金銭を擲棄する処綿繡を泥土に委する所なきば客も甘んじ他も亦た貪ぼりて怪しまざる実に悪ふ可き弊風なきども之を惡いび足を花街に容きざるに若らざるのみ而して此利益分配の事楼々に由て一様ならも全たく楼主の手に帰する所あり三分を若い者に與ふる所あり或い其幾分を娼妓に與ふる楼もあり獨り大見世ハ如の客を好まぬが故に此利益の全額を茶屋の一手に奪ふ偖娼妓に分つ楼ハ大抵並小見世等娼妓等自らら体面に関係せぬ楼に限り其趣意如何に在と問へば娼妓ハ客に直接する者故に是より客に勸めしば濡手で泡の利益を得きば斯くハ利を分つの事あるなり看官試みに小見世に進撃し見よ仕ぐ唯ぐ酒肴を之を取ふとを勸むるハ実に閨中の反對なり所々

○小物の事

小物とハ何ぞ揚代及び臺の外ハ取らるゝ金の名目なり此事たるプリの客と雖ども大見世ハ於てハ決して取らず中以下ハ皆貪ぼると雖ども茶屋より至きバ之を取らば蓋し定價三十七匁五厘の娼妓と五十匁ハ賣て之を埋合せるが故なり今小物の代を名細ハ言んハ厚薄ハ拘らず夜具蒲團の代一枚ハつき三匁燈心ハ髪飾さ燭代一本ハつき二匁五厘火鉢の炭一盃四匁夏ハ火鉢を要とせざるゆゑなり

ろく目ハ見へく氣の付ざる物と小物と唱へ十匁前後を奪ひとらるテモ偖もセチ辛ひあるさもあらむや

○初買の事

花柳の通言に曰く裏に来ハいハ客の恥馴染ハせざるハかいらんの恥と足そ初買ハ初の御見ハしく其客の鼻下を三千丈ハも及べしめん始めなきハ待遇と鄭重ハをるハ一般の習しなり乃ち裏ハ来ざると得ぬ趣きあるも然きども互に

心を知らざれば如何ならんも遠慮がちふく唯沈
黙し時々客の挙行を窺ひ自己の化れ皮も亦
さ現はさざる客も彼の振る〻一條を恐れ十中七
八は必らずば萬事扣へ目ふし速暴の夏なきも此
を又さ人情色界の通義なり然れども遠慮ふ程
あり扣へ目1度あり唯どかはらんと思ひ付き
ん事を之を勧め洗と澄し〻無言なる時はすや
此客人は氣の詰る人ざるを忽ち振の一字は端
緒を開き果は本物となり終宵膝吉を抱き肝癪

玉を唾壺ふ叩き込む不聊を来せい諸君もゞし
覚へあらべし余決して無と言せば然りと言て
一山文久ゞの駄洒落を管と共ふ吐出したら
んふい無言より聊きろ功能もあり且つ中見世
以下の娼妓ゝい面白からる可きども真ふかは
らんの肩書ある娼妓ふい其客さて見識なく幇
間ふ類似もると厭もきオヤ馬鹿らしい跳ッ反
りダヨふ一目ふ振るゝい疑を容きば故に其中
庸を取り酒酣ゝ一ッ二ッの洒落は有も可なり

而して其挙行い成丈氣取ば疎暴ゟ法らも只何
となくおゝらんゟ戀着しゝる風情あるゝ已
にして流櫳ゟ坐御手水に入るとの謎語なり
云ふ時ゝと早き趣を見せ何ゝと機會ゝして閨
門ゟ赴くべし此時ゟ當つてや小楊枝の皮と嚙
碎き口中の惡臭とゝる抔い秘事と云べしさて
閨門ゟ入る後ち再顧の念あらば密ゟに床花人
知らせば金と遣るを床花と云茶屋ゟ知らと惠
もゝば其頭とゝらるゝ故ゝくいゝあり
むべしと雖ども其おゝらゝの見識と心を看破

る眼の栗玉を所持せゝるゟ抔ていゝ反て笑を招
くゝ故に初心の人い先ゝ見合せ其金の幾分を
流櫳ゟ振り向け纏頭とゝるゟ若ゝる也偖鴛鴦
夢裡の人とゝるゟ先つゝや猶坐敷ゟ在しゝが如く
無言なる可らも只ゝ面白おゝしき世話と聽せ
他ゝしゝく飽しめゝるゝを肝要となも然もども意
氣な人物で御坐いなるゝと鼻哥なぞを迂鳴い頃
ぶる禁物と云べしゝ何れと云ゟおゝらんい日毎
に歌妓の美音に聞おき其月よく巧拙を知るに

富と以て仮令少しく美声と雖ども素人の胴間声かい感ぜざるのみならず必らず之と厭ふて其生意氣を憎むい蓋し中見世以上かいらんの心なり以上は是き初買の心得かして余の無用か世話と初心先生か燒く痴心厚待と受合證券印紙なり余猶ほ進んで雲雨の趣き如何せん風俗と壞る恐あるも何ともいやか氣あり年ら之か換さか初買の景況と以て足未だ花柳の地と踏さる温厚の人物か告ふあるんとき提箱提燈而先於賓客者是茶肆之婢也客誘ふハれて青樓の門頭か臨むや妓夫異口同音か曰く被入ーやいか客様タヨーー。進んで式臺と見れば上草履一行か排び其穿ふ階に蘭階を踏んで樓上か至れば若者先んドて一の廣間か導く此廣間と見通しと名け多くおいらんの往来さる處か設く其名たる衆娼妓の往来さる時我客か あらさる哉と見通ま処なもバ也若者手と踵き

莞爾然として曰くよく被入りやいまして　たこ
お馴染様でもさい外ろお初買様で被入り外ろ
と是い此楼ふ馴染なるふ初買ありと偽詐を他
のおいらんを進め後ふして馴染のおいらんふ
其化の皮を剥るれば苦情スン〳〵として起れ
べ斯く念を推ふり已ふして初買たる事判然と
もれば容姿年齢等客の望るふ應ず或い焉真ふ
就て選まりを以て之を進む既ふ極まれば若者唯
諾して去り此内酒肴并び至暫くして廊下をバ

タリ〳〵と高六寸餘の上草履をヒタ〳〵ふ踏で
来る者ハ則ち此れ今宵鄭綿山の上ふ於て戦争
を挑む歌娼なり坐ふ入て斜めふ坐し陽いこ顔
を見せば時ふ若い者曰く難有し茶屋曰くお目
出度し　此際客の娯面相を見るふ整骨なる道
士其人と雖ども其實沈と澄して拝命の辞令書
を請取総殿と一般凡俗の悲しき亦已を得ざる
也客盃を浮めて之ふ差せば歌娼唯の一字を以
て之を受一寸と客の顔を見尋で盃を客ふ呈き

是れ華燭の三々九度に擬する所蘿蔔なる赤繩の結び給へり。相惚れして其生命を棄る發端。客溺れて其身代を烏有に帰し笑を里門に遺す基ひ。いちに思ひ付て其身揚の為に借金の淵に沈淪し果は足を抜て脱走せるを警官に煩はし住替に出る苦を播く源なりと。唯其れ此一席より生ずる也嗚呼色男ふい誰がなる罪作りと謂つべし

敵娼居る支丸を十四五分又ぢロりと客の顔を詠め起して他ふ去り再さ来らば然れども一目上

ふ於て好さらしい人と思へば暫らくして来り微笑を含み茶屋の側ふ坐し心少しく娟を茶屋ふ呈する色あり是れ已に長く客ふしられ心あまび也此機を外ざる萬支拔めなく男子らしい擧きい有び敵娼戀々して大厚待ふ厚待是非十銭頂戴と言いざるを得ぬ場合ふ至るハ火の見ぐ如く明々たり十銭頂戴とハ受賃頂戴と同ド意なり初買の景況此の如し且初買ハ仮令ふ。りと雖ども非常の野暮ぐ乱暴人ふ非ざる以上ハ十中八九決して振

誰人不好雲雨情
大切世嗣自此成
請看鵜鴒
接尾事
化為呵
呵々々
聲

嵩陽　天然舎迂似夢史

初買ひ付の圖

上四葉肉

るく事なく其後朝ゝ當てや今度ハ何日か出なまるの一語を以て送り出し客心をしく残り惜らしむると例と為す愚佛有詩為證

後朝壇梯響下来寐躬欲別叩客背急度御近中

○裏の事

裏といふ裏壁反せ事なり初買の次と云ふ裏ゝ共ふる金と裏祝儀と唱へ大店ハ廿五匁中店ハ十二匁五厘以下ハ在てなきゝ如く客の心ふまる此金ハ獨り帳場正面の

若者の手ふ入り更ふ他と肥さば

○馴染の事

客を馴染ふせるハおいらんの榮誉客ゝ遇まる

ふ如才なきを表せる招牌娼妓社會ふなりてハ大ふ誇る所偖て馴染となるふハ馴染金を與へざる可らず其金額ハ並見世以下ハ一圓中見世以上ハ二圓五十錢也但しカンバの這入ざる中見世ハ皆一円へ去れども此金皆おいらんの手ふ入らば二圓五十錢の内五十錢を茶屋ふ與へ又五十錢を鴇母と若

者ハ廿五銭ツヽ配與し其残り全たく自己ハ入る而してハいらんよりハ手拭一筋ゥ或ハ煙草一斤ハ玉章を添て客ハ呈し之を謝し其日より客の姓或ハ名を呼び再さお前はんを以て稱さ此且酒肴の膳も面目を改め蝶足と用ゐ之ハ添るハ象牙の箸を以ていハ其飲食をるや所謂さし向ひ珍鴨主義の小鍋だて箸と箸とのからみ合出雲の外て結んざる浮氣夫婦の様を顯ハし互の我侭も亦此日より生ずるもの也そもゝ馴染金

ハ何等の譯と問バ猶是結納の如き者ハて真ハ赤縄を結びたる印なり故ハ未さ馴染ハ成ざる間ハ他の娼妓ハ見立替せんとすれバ昼夜の仕舞を（則ち昼夜の楊代を拂ふなり）付れバ自由をば得べしと雖ども馴染となりてハ手切金を出し謝さゞるを得ず其金額ハいらんの見識ハ因りて二十圓も請ふなれ共大抵ハ大見世ハして五円より少なからぬ十円より多からざるを定額となし中見世ハ三円より五円の間ハて之を肯ず然し見替

られうるかいらんハ世間の手前大ふ恥る所あ
るてう夫が為め新娼と呉越の思を懷き角突な
ひを生ずる事花柳其例一少なからぬ道士往年
此不実を働き新娼と狂ふ際頭上一紙の飛来も
る有り把て之を閲ずふ旧娼の投ずる詩なり終
ふ此よ因て木樹ふ帰り罪を謝せり通人なる者
の為すべき支ふ非ず其詩ふ曰く

一自別郎君三餐総不適非關摂養乖應是愁成
積

○娼妓の客を振る所由

狂句ふ曰く「女郎買ふられて帰る果報もの」と是
を疲我慢のみ誰ぞ貴重のお銭を棄て振るいを
甘んぜる者あらん厚待て面白ぞらんと願へば
こを買ふならん余や斯る我慢人の振るゝ所由
を説き諸君として悉く色男たらしめんと欲ず
諸君ヨ娼妓を指て何と呼び做ぞ當時女郎子供
と稱せり解放以後ハ恰ぞも女郎阿媽と稱すべ
き風情なれども一度解語の花園ふ移し植られ

路人の折ふ委せも至りてい今ふ猶女郎子供の
稱を免れば試ふ思へ彼等昼夜何等の事をな
して白駒を送る稗史小説を讀ふ非されば三線
を弾き喃喋饒舌まいらざれば買食なし鼻糞を
圓め更ふ一定の目的ふし子供と何ぞ異ふ
故ふ多く我侭ふして其氣ふ喰ね支あれば此を
心頭ふ掛け肝癪ふ障らせダバをこねる等娼妓
たる者往々此類なり然るふ不通の人物之を酔
せば唯己れ獨り面白ければ足りとし所謂子供

たる女郎ふ開せば其癖閨門ふい酔を有
を暴親不孝な聲を張り揚げ箱根山ふ目盲馬を
牽ぐ如き節の合ざる端歌都々逸を我鳴さて獨
り通人ぶりて娼妓の穴を言ひ他をして赤面ふ
堪ぶ耐下へ脱走せしめ或ハ氣障な擧止をし総
て物支ふ拗執其上酔て噴嗅々々管をまき閨中
ふ入ば其来るの遲き耐へび手を拍て之を促ぐ
し或ハトンチンカンの高聲を發するぐ如きい
無論振るいい猶子供の強い伯叔さんを見て嫌

ふゞ如し然れども是は酒ゞ言ふる者とし詠し
賺して眠らしむる方法を施こさるゝゞ故ふ同
し振るゝと雖ども情ふ於て憎からび唯真剣ふ
振るゝは其坐敷ふあるやオツウ氣取り他の青
樓の内外及びおいらんを品評し夏ハ扇をパチ
パチ鳴し冬ハ肩を聳らし擘を懐ふ張り煙管を
指頭ハ廻し乍らロの中ふて歌を謳ひ言語も堂
々けまとろ又ハ実ふ堂もそんな事ハ飲さいや
せん抔と総て幇間ゝ落語家の如き状態あれば

醉漢ゞ馬鹿騒ぎを演ぜしよりも一層の振を招
ぐハ目前ふて道士なぞハ往々此目ふ遭り然ら
ば則ち如何して振るゝ不幸を逃るゝや一寸お
隣りのお坐敷を娯覽

〇厚待所由

娼妓と雖ども情を知り豈木で鼻を縛る薄情者
のみならんや真實を愛し無情を憎むハ我人と
同し然れども彼の客ふ對する情ハ商賣の情ふ
して心底然るふ非ず猶ホ高個の貨物と一般價

を受て情を渡し客去れば則ち忘る南個の貨物を渡せば再さ其貨物を思ハざるゝ如し去り下ら甲い性なる貨物てい性なき物。故ゐ其間自ゝら差別なき能いび今其厚待めゑんを饒舌さいれば彼の思へば思ハるゝの法語を以て此が基楚とゐ仏まゞ青樓の坐敷ゐ在や虚心平氣の内ゐ味を含み其所為賤しゝらば責ゝらば萬事ゐ抜めふく一体おいらんを慰さめ閑れゐ思ふ様子ゆるべし仮令ば厳各他の坐敷より長廊下を

経て来り身体冷凍ふゝゐ如き夜ハ我勝頭ゐゐゝ火鉢を推て譲ゝゝ如き真切の所置を本とゐ言語ハ柔和ゐして荒々しゝらば語氣雄ゐ優しく判然として男子らしく無理を言ハび也ゐ類りしげゐ見せるを善とい如斯きれば其始めおいらんの心ゐ於て敢て意とせざりしも終ゐハ則ち諺言ゐ所謂虚ゝらてゝ誠の情を現ハし商賣を以て待遇ざるハ色男社會のよゝ知る所なり若し此機會ゐ投じだる時ハ其當坐足を遠

くさへ〳〵ひ如何とふれば花柳ハ色の海情の港なり日ふ游客の錨を下ろし者幾千ありしを知らひ其足の遠き間ふハポツ〳〵と真情の皮はげ薄らく者ふて且更ふ真実の客ふ出逢へば旧客ふ盡き情と新客ふ振り向れバあり是則ち去る者ハ日々ふ疎の謂ふ一て黒人も素人も決一て此一言の外ふ漏ひ去れば機會を得されハ之を失なハひおいらんの心ふ我真實ふ銘しもげざらん支を要きべ一斯き〳〵時ハ聊ら遠ざらるも

依然として変ぜざるハ断一て之を保證き。然れども其真実獨りおいらんふ而已盡きい未ざ全たく者とせひ諺ふ曰く災ハ下より起ると故ふ其仕役きる梳櫛及び鴇母ふも情をうけおいらんふ與ふ可き金も下々を廻一或時ハ我おいらんと交際厚きおいらんの仕舞を付け玉一本買ふをいふ自分の部屋ふ招き自已も其友立たり人と来るの趣きある可一斯れバ始め厭ふ心ありしおいらんも他の評判ふ善きふ由りて自らら新み急

ふ可愛人ふなーたくさんるハ又是れ女郎子供の情熊籠絡し易きは実ふ我手足を役もるが如ー想ふふ世間振るゝ人物ハ平素朋友の交誼ふ於てハ亦真實ふうる可ー請諸君ヨ左の詩中の人となれ

不愛千金子秤憐落魄人風流歡自足豈厭曲衣貧

○娼妓を弄もる悪謔

実塔湧於蒼翠中壮殿伏下茂樹間紅塵四合紛錯如織是浅草公園也兩個年少且語且歩相顧曰ー今朝の戯謔ハ何と妙なるもやしうしー一体堂いふ訳ぞネ甲去もバ彼の楊州楼の乗鶴の処へ先月拠どころない附合ぐ往さ所ゲ彼奴ならくの達者ものゞ四十八手の表裏ある一件初買惚の趣の見せるのサ僕ハテ妙な奴ぞと思さゲ何ほーろ面白い故裏ハ往さ処ゲ彼奴の心い余程僕ゞ甘と見とろ然らぜんい面白い情人情人ハ三ッの訳ハ未を見よまでも為り積うと見へて極く

堅固店散財少あるを遊べ世中等の真情と現れを
訳サ　ヘウム十戔頂戴と云所ゞ甲底で僕ゞ兼て六
朝楼の金陵の許へ往く事を嘆つけさ者ゞ故堂
ぞして彼方へ向く足を断ち自分の方へ斗り呼
ふと云下心故ゞ金陵ハ斯云情夫ゞ在のなん
のと僕の胸でクスグリかけさのサヒヘウム甲其
位ざらら陽ゞ女房氣取で見せ若しお前をん今
度金陵さんの許へ往と兼知しませんヨ抔と云
風情サ底で僕も自惚でいないゞ此奴嘘ゞ真ゞ

一番化の皮と見てやらゞと一昨宵金陵の許で
遊んで帰うゞけゞ金を四円ざしおいらん少し
訳ゞ有ゞら此金を預ゞつさお呉そして何処の
青楼ゞらでも我輩の手紙ゞ来さら卿ゞ貸を積
りさ渡してお呉と云ひ残し昨宵一文なしで
楊州楼へ登り淡白と洒んで今朝會計を見ると
二円七十戔サ所ゞ嚢中無一物達ゞ様と親類の
一件ヨ因て乗鶴ゞ若しおいらんお氣の毒ざゞ
今度来まゞ勘定を立引立替する事てお呉でないゞ実

ハ持合せが無からと云とサア彼奴め土狐の本性を顕ハし真個ホ僅な事で濟ないんでもけもども先月病院へ入てゐさ者でもう真個ホ都合を悪くしましさと云故オフ左様ろへ其い仕方がれへと云て馬を連て帰るのも外聞が悪し内密で来たのに茶屋で借るのも変な者ざしと少し鬱いざと思ひなせへ　ウム思とか　甲スルと乗鶴も前々ろら云さ事も有故貸ない迚も種々心配の風を見せるのサ　僕ハ判然彼奴の魂性を見抜さらかゆらん仕方が無へ一寸當り箱　硯箱のとお貸しとサラ〳〵と一通の鴻媒を認め実い外て游んで濟ないが勘定が足ない故金を四四貸て呉なと云意味で其ういい書ホ六朝楼まく金陵さん楊巡楼ホて次郎ようと認め乗鶴の桐櫳の前へ投り出しポお萬どんお前氣の毒ざが誰ろ頼んぐ六朝楼まで往て貰てお呉然し金ろ来ろら確な人ろ宜よと故意と大束ホ云て持して遣ると乗鶴め変な顔をし乍らヨモヤ貸まい

と思ふ故か前さん他で都合ーさら堂でも若ー
出来ないと外聞ガ悪いでい有ませんうと校も
ちらナニ金陵い四四や五四の金ハ困るかいら
んドやア無よ好や手ハない所ガ如何な都合で
もして呉うと鼻であしらッて居る内使ガ帰て
来て唯往て参りまーさと出ものい金子在中と
云ふ返事だらう此時乗鶴の顔色い赤くなり青
くなり宛いでも這入たい風情さ、底で僕其返事
の封をキり故意と四四の金をバらーと落ーな

何ざ用ガ有うち帰りに寄と碌な用ーヤア有う
めへと云ッて袂へ捻込四四の内二四七十錢拂
ひ三十錢を掃撒ハ遣うオイ使ひ賃ざヨ。ヤレく
金陵のお庇で恥を搔ぎハ仕舞さ乗鶴さん大き
な心配を懸て済ません唯左様ならと出掛るの
ざガ何と可笑ろら。其いつハ妙計狐の化の
皮を引剥腹をエクルハ尤も秘計ダと此兩個
の話ーー畢竟一朝の惡謔なれども事ハ臨んで情
の嘘実を窺ガなハ此策ろう上なるハなー世

の娼妓か魅きゝ　汚贈珍考へきゝ可らむ

○游人方法

労力と交換しゝ貸泉誰か之と徒らか壕溝へ
投棄もる白痴あゝん必らむ貸泉と平均きる者と
待て映ふゝや一般の情なり然もども典へく物
の遺るあり遺らざるとへ器財と買な
も遺らざるとい娯と買なり而して人情の帰も
る処ろ遺る器財と買かい多く吝なもども遺ら
ざゝ娯と買ゝい賛成者多くして動議少なし然

らば則ち娯楽なる者い天心哉已か之と天心と
う出ると為ば其娯楽と買ふや箆棒か游び様と
為さゝ貪な目ゝ遭ぎらん事と注意しし一円い一
円十円い十円全ゝく其金額か應むる娯楽とか
し文々一ツと雖ども余計か横奪らも労力と贅
にしヤレく酷い目ゝ遭ゝとの愚痴と遺も可ら
む斯く謂ば平規調面ゝして先つ珠算と取て而
る後ち游ばざゝと得むと言んめもど余い如斯
な白痴言と扱もに非む世人い動ももも鼻毛

と延し何ぞ彼が宜ひ善々此が宜ひ善々と人の口車小駕し扇動小乗ド好子に為らんと欲して死金と費ふと吝めばなり然りと言て彼い嫌ざ此も好まぬと獨り娯しめば足りとも きば娯楽い去つく殺風景と来し倒底肝癪の種と為るい数の免もざる所ろ此ゆ為ふ游びい游ま游び游びに游ぶもざらん事と欲し仮令女郎と買も歌妓と聘もるも自ら彼と制し彼ふ制せらもざる事と心裡に潛め陽に表ハさば而して客主の

別と去つく成い娯しめらき或ハ娯しませ唯ざ朋友の觀となして愉快と取もバ其侍坐もる者も心ろと置ろ也我と忘きく心裡に在る限りの娯楽と呈し娼妓藝者に限らず其人と敬愛し其至ると聞ろバ欣々然とし遇もるい猶ホ婦人ふ珊瑚珠と見もるが如し斯の如くんバ三四ふて四四の娯と買ふの思ひありて貴重の貨泉を門き殺もの患ひなし偖花柳ふ遊ぶまい一の覚悟なろる可らず結局彼等が吾人として皇帝陛下

の位置と假有せしむるい貸泉の為を呼おきバ時々金を與へざる可らぜ去り乍ら機會ゑ投して與ふきバ一円の金も二円の雑有味を生ず之を失ふく與ふきバ二円の金も一円の通用ゐ止まる人若し其機會如何と問バ是き甚ず明説ゐ苦しむ所ろ筆奴墨婢のごく尽き所ゑ非ず所謂以心傳心の訳柄なきども試みゐ之を言バ多く奔走せるけさる時二三日流連の時或い紋日花柳社會い猶ゑ旧五節句と紋日とあり或い四五回めゐ一回等餘い

放挙ゐ違あらぜ且之を投ずるも衆前ゐ於てせぜんバ入佛事ゐ属して何の功なきい勿論し

て死金の往どまりと云べし或ハ人。楼奴亭婢等ゲ軽薄笑ひ又い媚を献ず用なき機嫌を取ら意を迎ふるゐ際し投金ぜる者あり是き大変騒動と云べし若し如此時ゑ投金きバ彼ら密らゐ同僚ゐ告げ迭々来て媚を献ぜ已ゐ嚮き與へさきバ亦と與へざると得ず何と飛ず散財ならぜや故ゐ常ゑい吝ん坊を示し機會ゑ投したきバ

常侍肉山酒池邊。端歌都二逸合惚舞。
宿走何時辞泥水。三蒲團裡臥為川。

大阪　新猫子

手酌一盃易變心。去求青
楼雲雨衾。翌朝勘定
大困却。獨在燈室
思沈々。

假心

栄枝庵松痴

箱個情情節案怖。恋路案物佞
稼物後悔恥。
宝永十丁巳年九月下旬　世樹色人中金弘

再之沈溺傾金閑。思切難是別煩。縁全世身
行地獄。誰者安止有情人。

鶴岡　北賀寄史

快〻共へ彼等ハ涙と喰を注意なくんバ非ず
遊びの方法概畧斯の如し餘ハ嘗て余が著の雑
誌同楽相談中道楽指南ハ於て率ね尽したれバ
更ハ将て茲ハ寫し出さの重覆と厭ふ諸君若し
明了と知らんと欲せバ請ふ同誌に問へ

○居続の事

端歌氏曰く「羽織隠し」て袖ひき留て如何でも今
日ハ往んなと云ひつゝ起く連子窓障子をそめハ引あけ
くあを見やさやんせ此雪ゝ」と実に居続ハ雪の朝或ハ雨天
の日を以て好機會ともとども若しかゝらんハ
二三人の廻し有て其客悉く居続しさらんハ仮令
雪朝雨天と雖ども好機會と云ふ可らず如何と
なれバ彼の諸方を廻し歩いて落什を痴話も口
説も身ハ入らず小鍋ごての衝き合も目の前二
三人て経過し来りさると思へバ小妬にハ非き
ども余り甘とせざれバ也況ハや名代床ハ籠城
して坐敷へ這入と得ざる時とや故ハ居続せん
と思へバ他の廻し無き日と擇み且彼の我と喜

こゝに趣きある時と好機會となり痛く引留んも
る時ハさを避くべし是も彼を惱ませ手段再さ
の逢せを一日千秋か算をしむる策略二上り新
内殿曰く〳〵怨る止せをとも其処はなせ又の月
日のなゝ様か停る其方の心より帰る此身ハマ
アどんなに〳〵らゝらゝと是よく穿っらうと謂
べし然し作ら此事うる獨り色男社會の要件か
して唯の人かい敢て用なき処とし

○懸版藝者の事

懸版藝者とハ本仲の町張の藝者の謂ふして其
會所か招版乃ち名札を懸〳〵と以て此称あり今ハ
其格式も絶へもグり藝者（懸版ハ非ざりと雖と云ふ）
も一般に税を納むると以て単か藝妓と云可な
もとも猶此稱存も、藝妓に二種あり一ハ別宅て
構ふる者一ハ青楼か衣食する者其往く処ろか
二途あり一ハ中見世以上か非ざれハ聘か應ぜ
ざる者一ハ中見世以下か應ずる者而して中見
世以上ゝ至る者ハ線香一本二十戔中以下か至

る者ハ十五戔なり偖此線香代全く藝妓の手ふ入やとまきい然らを一本二十戔の内祝戔返
—と唱へて茶屋へ四戔坐敷代として青楼ふ四
戔残る所十二戔其手ふ入る又青楼ふ衣食をる
者又びモグリ（俱ふ中見世以下ニ出る者）十五戔の内十戔を
青楼ふ取らを手取僅ふ五戔のみ豈ふ憫然の
至りなるを也や然をども中以下ふ應ぜる者ハ中
以上に應ぜる者の如く仮令線香尽ると雖ども
客を鴛衾ふ送りかいらんの臨むを見てふ機嫌

よ—の一語を残—去るゞ如き猶豫あるを線香
と俱ふ消へ一楼ふ四五席を稼き二十戔より五
十戔の間の纏頭ふ由て絶るにふ茶ふ混—エン
ヤラヤット三円の税を收め紅裙を翻々—て糊
口を立故ふ其身入ハ又て懸版より善く懸版ハ
又て悪—是き近年仲の町猫の喧々顔ハで木魚
講ふ加入—魯文翁の筆誅ふ係る所以其情実ハ
無理で有ませんのサ

○幇間の事

幇間ハ牡丹餅ハ非ず餡倒ハ非ず尻餅ハ非ず疝氣持借金持痞癪持仇持焼餅金持宜ひ心ろ持ハも非ず理の称こそあれ矢張酖然たる人間ハして其景象懸版藝者ハ異なるず或い清元の師匠之と為し或い一中節の先生之と為し或い躍りの大人之と為し或い藝者の亭主之と為ば其為す事い媚と賣と以て本色とし佳人の周施と内職と為す彼の滑稽諧謔客として絶倒に耐へざらしむる者ハ野幇間ハ幇間ハして真の幇間ハ齒ひせず然らバ則ち何の面白い事ろ之と有んと謂バ請ふ賜して之と見よ其愉快なる言不言の間ハあり

○惣花と投ずる機會

惣花とい楼中一体へ金と與ふるの謂ひ其金額家々ハ依りて齊しからず尾彦楼ハ五円大文字楼ハ四円品川楼ハ三円五十戔稲本と角海老ハ俱ハ三円中見世ハ總て二円五十戔其以下ハ僅ろ一円五十戔ハ過ず之と投せバ左の如き紙牌

と見認易き所ゝ張り以て客の傲奢を衒ふ

の惣花

ゝ井稼　小紫

斯く家ゝとりく其金額を異にするい蓋し人数の多寡に因る而して其配當を明説せざれば仮令ば三四の惣花なれば鴇母と若い者（但し帳場ゝ正面の者）廿五銭づゝ出入の仕事師に一円残る一円五十銭と家内中ゝ鍋ゝも權助まも分配して而して

主ハ唯と其頭とそゝのみ此總花と投ぜる機會い馳深後四五回の時ゝありと雖とも其実紋日ゝ達て之と為ぜと活用の仕方となし殊ゝ外見ゝ於て大盡然らゝ虚栄と占る者とも

○娼妓ゝ金と與ふる機會

黄金不多交不深といい今と去る千年以上人物優美ゝ〳〵く温雅の頃の唐人の句なり上古まゝら猶金銭ゝ依て交うと厚薄し情と表裏ぜ況んや文瞑怪化活馬の眼と捻取り人の膽と奪ひ他て跳

飛し樸り倒つく已と利せんと謀る貪婪の天地
薄情の世界さる方今とや又況んや廉恥と解せ
ぬ聾おどし道理と知らぎる暗夜浮耶の化階物
さる娼妓とや情交唯こき黄金ふ頼るあるのみ
といふ云者の前ふ陳述もるが如く十三戔六厘と
其高と一三戔七厘五毛と其底と一一宵の情と
賣り而して綿繡と纏ひ珊瑚と枕と一桂と焼き
玉と炊ぎ鶴と烹るの贅澤と尽も何ふ倚て之と
為もと言い客の恵と得てもるふ外なくも醉多

道士常ふ曰く死おど恐ても遣のい嫌ざと其意
蓋一娼妓ふ金銭と共ふるい馬鹿ふきさく取る
るが如一と是も無情の天ぺん不粋の実天上鴉
呼可憐さる事と技も哉請ふ新内の文句と聴け
苦労ともるふ習ひぞと云が中ふも私一程世
ふおおきなん者いふ親ふ添寝の夢ふさんへ
見も知りるせぬ人中へ賣き廓いの憂つとめ
禿の内の氣苦労い眠る火ろげと追ひ起され
夙の使や返事さへ長い廊下と行通ひ情夫の

手引や相圖の手てん氣ともみ裏の色ホ出て
鴨母ホつめらき叩ゝ其苦と脱て漸と見
世へ出雲の神さんも片びねきなる緣結び嫌
ぬ客衆ホ虐らきく泣てあろきぬ夜いくても
なし
嗟真ホ彼等何と楽しみに苦海と勤むるや客の
恵とゞく戯場と見或い望む物と得或い衣裝と
飾りゝて僅ゝに苦労と消却せるのみ斯きば情
と娯しみ深せざる通人い彼の一河の流きも多

少の緣の字面ホ對で他が心と慰むる所置なう
る可らぢ偖其金と投與きるにかいらんよりの
無心ゝ出く共ふるハ誰しも心ろに快ゝとせ
ぬ者旦金額も多きと要き故ホ他の言ふと待ば
馳深後三四回めに投與きる哉或い其三四回の
頃紋日あきバ其前日ホ投きるとゝく機會とを
総くるゆらんの費用要きる事春或い秋燈籠或
い移り二。加の頃又
更の頃ある前と計て投きるきば則ち三四の金る
五四ホ通ド他の喜び亦平時ゝ一層なりとゝ

人若し是を鼻下長の所為なりと言へば勝手に言
な余い断じて云んとも是を已を鼻下長に由て
奪ちまうる思ひよりの見なりと

○掠攏の事

掠攏といかはらんに使いまう女の名目にして
昔時い年齢十六七の別嬪之を勤め或い時に情
を賣り通人社會に於ていい掠攏買と称し甚ぞ娯
しみと為せし者なるぞ今の掠攏い乃ち然らも
畢竟もう所ろ下婢ら雇ひ婆アに過ぎ其年齢廿
歳以上六十歳迄の者にして茶屋の婢女或い娼
妓の春色を失ひうる者之を為を蓋し青楼の
事情に明らかなるべかはらんの為に便益なるべ
なり常におかはらんの衣裳の世話或い其客の宴
席に侍して周旋かし又い無心を言ひ惣花等を
頼むい皆此掠攏の任ともする所ろ其おいらんよ
り受る給金い実に僅なるども客の纏頭に由て
身代い反ておいらんより富むのあり但し花柳
の慣習掠攏に帯をメる事を許さば是を以く白

昼花柳の間を過きゞ大道臼東西ゟ入き違ひ棚尻南北ゟ走る亦奇觀なり

○若い者の事

若い者之を牛と呼ぶ當時娼妓を馬と見做すゝ之ゟ對して此稱あり青楼ゟ衣食をる者あり一宅を結構する者あり而して給金も齊しゝ

ら大中見世ゟ於ていい五四より二十四までの間を給き蓋し其技量ゟよるなり然きども楼主の代理となりて帳場の正面を占る者ゟ非ずれ

ば臨時の利益少なしとなき並以下の見世も又客を誘なゝゟ功者なる者ゟきゞ五四以上より十五四以下の給金を與ふ彼の下等貧見世の若い者ゟ至つて無頼漢の昼鳶の亞流強く客の金を貪ゟ飲食代ゟ附ろけ等となして漸く其口を糊き牛も此ゟ至ていい常に究々如ゝる糞蠅者亦酷ゝらぎや

花柳事情中之巻終